

短期大学における保育士養成について (その2) —— 基礎学力や学習意欲以前の問題を中心に ——

佐藤 達 全*

On The Method of Educating Students to be Nurses at a Junior College (2) : Focusing Some Problems Before Their Basic Scholarship and Their Desire to Study

Tatsuzen Sato

Abstract

In the last issue, on the training of nursery school teachers I pointed out the problem which is the lowering of their basic scholarship and their desire to study is lying before them. However, putting the blame only on them, we cannot essentially find a solution to the problem. There are some causes modern society has and that lowers their desire to study. Therefore I search for the direction to settle the problem along with the background of the lowering of their basic scholarship and their desire to study.

Keywords: education for nurses, latitude education, outlook on life, independence, object consciousness, sense of achievement

キーワード: 保育士養成, ゆとり教育, 人生観, 主体性, 目的意識, 達成感

1. はじめに

保育という営みには、保護（養護）^(註1)と教育^(註2)という二つの要素が含まれている。専門的には「保育は乳幼児の心身の発達を目的として、幼稚園、保育所などでおこなわれる、養護を含んだ教育作用のことであり、養護（保護）と教育を結合して、新語の保育が生まれたものとする」（保育小辞典：大月書店）と説明されるが、「広義には、家庭の乳幼児を対象におこなわれる育児も

保育と呼ぶ」（保育小辞典：大月書店）とも言われるように、「わが子」を育てることは人類誕生以来行われてきた自然な営みであるから、高等教育機関において専門的な知識を学習したり技能を習得したりした人でなくても可能なはずである。

それゆえ、特別に困難なことではないはずなのだが、近年は家族の形態や社会構造の変化に伴って、そうした自然な子育ての知恵（文化）が伝承されにくくなって、子育てがスムーズに行えないケースが増加してきた。また、旧来の生活形態が

* 育英短期大学保育学科

大きく変化して夫婦が共に就労しながら子育てをする家庭も多くなっている。そのため、勤務中の保護者に代わって子育ての役割を担う専門機関（保育所・幼稚園）の存在がクローズアップされてきた。

2. 保育や教育に求められている基本

職業としての保育は、国家が定めた一定の知識や技能を習得した「専門家」（保育士・幼稚園教諭）が担う公的・専門的な営みであるから、その理念や目標は明確に規定されている。たとえば、『保育所保育指針』には、〈第1章総則 3 保育の原理〉で保育の目標として次のような事柄が掲げられている。

保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。

- (ア) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。
- (イ) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。
- (ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育るとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
- (エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
- (オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。
- (カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力

を育み、創造性の芽生えを培うこと。

このことに関して『保育所保育指針』の『解説書』には、

「保育所における保育は、本来的には、各保育所における保育の理念や目標に基づき、子どもや保護者の状況や地域の実情等を踏まえて行われるものであり、その内容については、各保育所の独自性や創意工夫が第一義的に尊重されるべきです。その一方で、すべての子どもの最善の利益のためには、子どもの健康や安全の確保、発達の保障等の観点から、各保育所が行うべき保育の内容等に関する全国共通の枠組みが必要です。このため、保育指針において、各保育所が拠るべき保育の基本的事項を定め、保育所において一定の保育の水準を保つことにしています」^(註3)

と、乳幼児の生命を保護し、その健全な発達を援助する保育の質を保つ必要性に言及しているが、さらに、

「また、保育指針は、保育所保育にとどまらず、他の保育施設や家庭的保育などにおいても、ガイドラインとして活用されることが期待されます」^(註4)

とも述べられているように、専門家だけでなく保護者が「わが子」を育てる際にも参考にできるような内容が多く盛り込まれているのである。いずれにしても、保育という営みは専門家だけが行うものでないことは明かであろう。

3. 保育者をめざす学生にみられる問題点

ところで、本研究紀要第27号の拙稿「短期大学における保育士養成について」(平成22年2月1日発行)でも指摘したように、これまでの保育士養成は2年制の養成機関に負うところが多かった。現在も2年制の養成機関を卒業して保育現場に就

職する学生は少なくないが^(註5)、4年制の養成機関の卒業生も増えている。その背景として、次のようなことが考えられよう。

①女子高校生の四年制大学志向が強まっていること。

②保育者に対して、これまで以上に高度な専門性が求められるようになったこと。

このうち、①に関しては、少子化によって高校卒業生が減少しているなかで、短大よりも4年制大学の方が経営的に安定するのではないかとの観点から4年制大学への改組転換を図る短大が増加して大学に入学しやすくなったことや社会の発展に連れて高学歴志向になったこと等の理由が考えられる^(註6)。その結果、(日常の予習や復習を含めて)全く受験勉強をしなくても入学できる大学が相当数に上ると言われている。

また、②に関しては、保育者に求められる内容が多様化し専門化したため、2年の養成期間では保育者として期待される資質を十分に備えられないといった懸念があること等が考えられる。

たしかに、保育者に期待される事柄はますます専門化しているうえに、保育者に求められる仕事の範囲が在園児の保育だけでなく保護者の子育て支援にまで広がってきた。その理由は、家庭の教育力が低下したことに加えて、近年における保育研究の進展に伴って、子どもの将来を見通した集団生活を体験することによる社会性の涵養や早期教育への期待といった「より高度な子育て支援」が求められるようになったからでもあろう。

ところが、これまでの保育者養成では、そうした専門性が求められていたとは必ずしも言い切れない。それゆえ、養成校の教員の間で、より高い専門性が必要だといった議論がなされたとしても、保育者をめざす高校生やその保護者にそのことがどれだけ浸透していたかは疑問とせざるを得ないであろう。このことは、4年制であるか2年制であるかを問わず、保育系・幼児教育系の養成校の入試難易度にはっきりと現れている。まして、

保育者をめざして2年制の養成校への進学を希望している高校生の基礎的な学力や目的意識に目を向けた場合、2年という短い就学期間で高度な「専門性」を身につけて卒業させることは極めて難しいと言わざるを得ないのではないだろうか。

このことに関しては奥山順子・山名裕子も、

「日本の幼児教育・保育施設や保育者養成機関においてはこれまで、保育者が高い専門性を要する専門職として認め、育成されてきたとは言いがたい」(奥山・山名「求められる保育者の専門性と大学における保育者養成」^(註7))

と指摘している。その上で両氏は、

「保育者の専門性における問題」として、実技中心の傾向、特に具体的な技能の獲得を重視する傾向や保育の目的が託児に矮小化され、保育者の専門性が軽視されたことをあげた上で、短大における保育者養成に対して

「養成過程では、保育実践者としての即戦力的、実践的内容が必要であるが、本来はそれを支える理論との関連を学ぶことが必要とされよう。しかし、それは短期の養成教育では困難な課題でもある」^(註8)

とも述べている。

ただ、あえて言うならば、これまでの保育者養成では、短期大学においてもそれなりの基礎学力を持った高校生が入学していたため、卒業後に現場で仕事をしながら研修を続けることで、かなりの成長が期待できた。その理由として、以前は女性の職場が限られていたため、学力レベルや学習意欲が高い高校生の進める分野が保育者・看護士・教師等に限定されていたからである。

ところが、男女雇用機会均等法^(註9)が施行された結果、基本的には性による差別が撤廃され、自由に職業が選択できるようになった。そのうえ、ある時期には保育という仕事がいわゆる「3Kの職場」^(註10)と言われるようになって敬遠されたこともあったため、保育者をめざす高校生のレベルを相対的に低下させたことにもつながったのでは

ないだろうか。

しかも、少子化による「大学全入時代」の影響も加わって、短大生の基礎学力と学習意欲が大幅に低下していることは否定できないのである。前掲の拙稿でも指摘したように、本学に入学を希望する高校生の基礎的な学力と学習意欲だけでなく、他の短期大学の学生に関する情報を総合しても、その思いを強くせざるを得ない。

そのため、奥山・山名が指摘するように、多くの学生の関心は実技科目に集中し、実技さえ身につければよいと考えて保育の理論にはほとんど関心を示さない。なかには、いわゆる「音図体」の実技の習得にも熱意を示さず、「おままごと」的に子どもと遊んでいるだけでお給料が戴けると思っている学生も存在する。

こうした学生は、以前にはほとんど見られなかった。そして、この傾向は本学に限ったことではなく、さらには短期大学にだけ見られる現象でもないようで、「私立大学情報教育協会」の調査によれば、全国の私立大学・短期大学の教員の60%強が学生の基礎学力が不足していると感じているという報告がある^(註11)。俗な表現をするならば、本学は「まだマシ」な状況でもあるらしい。その証拠に本学の幼稚園・保育所への就職内定率は県内の他の養成校（2年制・4年制を含めて）に比べて相当に高い状態を維持している。

ただし、それで満足しているわけにはいかない。基礎的な学力が低いことに変わりはない上に、学習意欲も著しく低いからである。こうした状況では、「生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期の子ども」（保育所保育指針の表現）を適切に保育することなど期待できるはずがないであろう。このことは、就職内定率が高いものの、必ずしも就職先の評価が高いとは言い切れない問題として現れている^(註12)。

4. 学生の問題点の背景

しかし、基礎学力や学習意欲の低下を学生自身の責任にしているだけでは問題は解決しない。根本的な原因は、もっと深いところにあるのではないだろうか。最近の学生を見ていて感じるのは、「学習したり生活したりする中で「答えを与えられるのを待っていて自分で考えようとしないう学生」や「少し工夫すれば解決するのにそれをしようとしないう学生」が増えたことである^(註13)。現在の小学校では総合学習等を取り入れて「生きる力を育てる」教育に力を入れているはずなのに^(註14)、学生の行動を見ているとその成果があがっていないように思えてならない。

次のようなことがあった。研究室に授業の資料を取りに来た学生に必要な枚数を数えるように指示したところ、その学生は机の上に重ねてあるA4の紙を1枚ずつめくりながら数え始めたのである。50枚ほどのプリントを数えるだけなのにあまり時間がかかるので、私が「数える時はこうするとすぐに数えられるよ」と言って、大まかな枚数を取り上げ、上下にたわめて紙の端を少しずつずらして5枚・10枚……と数秒で数え終えると、「先生って、すごいんですね」と感心した表情をしているので、私の方がびっくりしてしまったことがある。

また、これはある園長の話である。どこの教室の窓ガラスも雨粒やほこりで汚れていたものの、だれも気にする様子がなかったため、週末に一斉にガラスを拭くように指示したという。そして月曜日に出勤したところ、透明だったガラスはすべて「くもりガラス」に変わっていたというのである。園児が登園するまでに、園長が再度のガラス拭きを命じたことは言うまでもない。家庭の教育力が低下したとよく言われるが、保育科の学生を見ていると自分で考えたり工夫したりする意識のない学生があまりに多いことに驚きを通りこして呆れてしまうこの頃である。

こうした事例は枚挙にいとまがない。実習園から「雑巾がしぼれない」「ホウキの掃き方を知らない」「お箸の持ち方がおかしい」といった指摘を受ける学生は相当数に上る。都市化が進み、家族の形態や家事に対する意識が変化し、生活スタイルも大きく変わって家庭でお手伝いをするのが少なくなった結果であろう。さらに、生活が豊かになって、ものがあふれている社会では、自分から周囲に働きかけなくても不自由な思いをすることがない。そのため、最近の子どもに「ほしいものは？」と聞いても、「特にない」と言う返事が帰ってくるのが少なくないと言われる。

先ごろ閉幕したアジア大会で、日本の金メダルは48個にとどまった。目標としていた60個に及ばなかったばかりか、韓国にも大きく水をあけられた。こうした状況について日本選手団の市原則之団長（JOC専務理事）は「これが現在のアジアの中での日本の実力だと認識しなければならない」と語ったという。日本のスポーツは気づかぬうちに、世界やアジアから取り残される危険性もあるとまで指摘されている^(註15)が、スポーツに限らず経済・教育・政治の世界でも同様の問題が発生しはじめているのではないだろうか。

以前に「三無主義」という風潮が問題になったことがある。これは昭和45年ごろから使われた言葉で、無気力・無関心・無責任といった、当時の高校生の性格を表現したものであるが、若者一般にも当てはめられ、これに無感動を加えて「四無主義」と言うこともあった。さらに、昭和55年には、挨拶もろくにできない無作法も加わって「五無生徒」が増えたという報告が日教組研修会で報告されている。

こうした若者の傾向は「シラケ世代」^(註16)と呼ばれることもある。変に「さめて」いて、「世の中なんてどうせこんなもの」と何かに熱中することなく傍観している若者を示す言葉である。近年の学生を見ていると、そうした若者と同じような印象を受ける。保育は子どもと保育者がふれあいな

ら行われる営みであり、保育者の人間性が子どもの人格形成に大きく影響するから、このことは非常に重要な問題ではないだろうか。

5. 中高生の意識調査から

学生がシラケてしまう背景にはどのようなことが存在しているのであろうか。手元にNHK放送文化研究所がまとめた『中学生・高校生の生活と意識調査』（2003年6月 NHK出版）という報告書がある。その中で、NHK放送文化研究所世論調査部長の佐々木茂高は、

「新人類」「エイリアン」「オタク」……大人が若者について語る時「不可解な存在」としてレッテルをはることがよくあります。中学生・高校生と、日常接している学校の先生からさえ「今の生徒は、いったい何を考えているのか分からない」という話を聞くことがあります。「キレる17歳」という言葉を生んだ少年犯罪が人々に衝撃を与え、単に分からないというだけでなく、「不気味な存在」という印象さえ持たれるようになっています。彼らはそんなに不可解な存在なのでしょうか？

と述べている（同書3ページ）が、この調査は現在の中高生の生活実態や意識を探るために、2002年の夏に全国で1800人を対象として実施されたものである。

この調査には、親子関係や社会に対する意識等の項目もあるが、ここでは中高生がなぜ勉強しなくなったのかという問題に関連する部分を紹介してみたい。同様の調査はこれまでに3回行われているので、それと比較してみると、勉強時間が減少していることがわかる [図1・2]。

もちろん、勉強時間の減少がそのまま学力の低下につながっているというわけではないだろうが、中高生の学校以外の勉強時間はこの20年間で明らかに減少している。「ほとんど勉強しない」は、中学生では82年の10%から17%に増え、高校生で

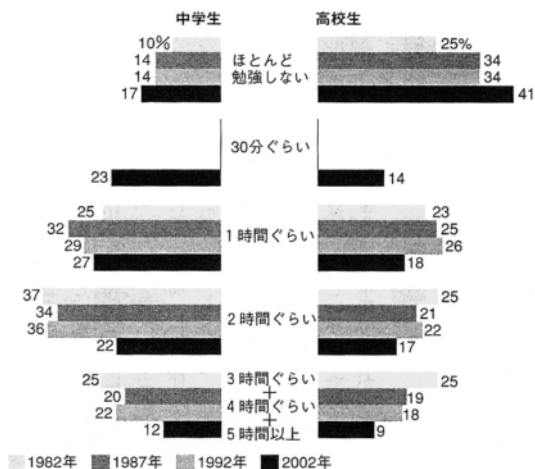


図1 学校外の勉強時間

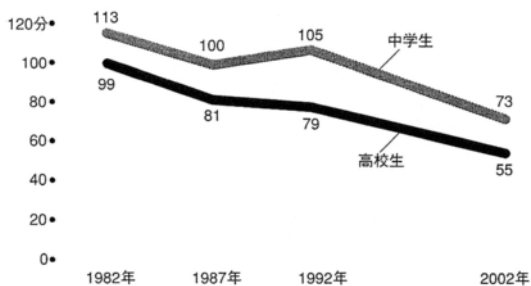


図2 勉強時間の平均

は25%から41%に増えている。この結果は、前号で紹介した東大の研究グループの調査結果とも符合するものである^(註17)。

さらに特徴的なことは、親の生活程度の意識と子どもの勉強時間が関係していることである。親の自己申告であるが自分の生活程度を「世間一般」から見て「上」または「中の上」と答えた層を「上グループ」、「中の中」と答えた層を「中グループ」、「中の下」または「下」と答えた層を「下グループ」として、各層ごとの中高生の勉強時間を調べたものが[図3]である。

また、親の学歴と子どもの勉強時間の関係でも、高学歴のほうが長くなっている[図4]。

このように、子どもの勉強時間は家庭の生活程度や親の学歴といった家庭環境と無関係ではないようだが、これまではこうした家庭環境による違

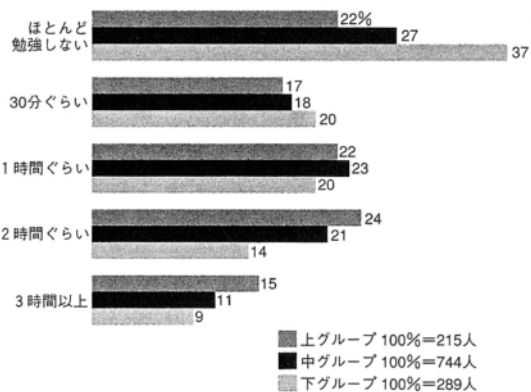


図3 生活程度（母親に対する質問による）と勉強時間

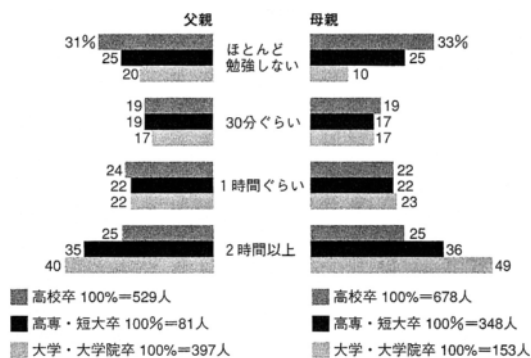


図4 親の学歴と中高生の勉強時間

いという問題が見過ごされてきたことが指摘されている(14ページ)^(註18)。私たちの意識形成には、日常の生活環境が大きく影響していることは当然であり、それは学力や学習意欲にもあてはまるのではないだろうか。

この調査では中高生の学習意識に関して「一生懸命に勉強すれば、将来よい暮らしができると思うか」[図5]「受験勉強はよい学校に行くためだけで、本当の勉強とは言えないと思うか」「自分が興味あることをもっと勉強したいか」「学歴がなければ社会で認めてくれないと思うか」「進学最終目標」[図6・7]「どのような生き方が望ましいか」等についても質問しているが、その結果から、学歴信仰が揺らぎ始めていることや「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」「みんなと力を合

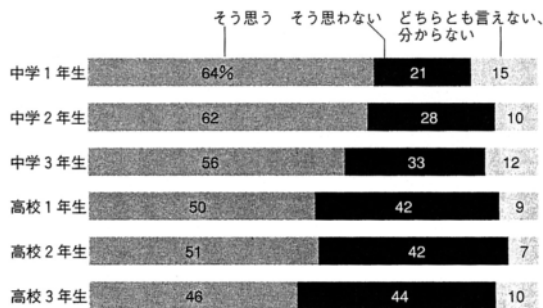


図5 一生懸命勉強すれば、将来よい暮らしができる (中学生)

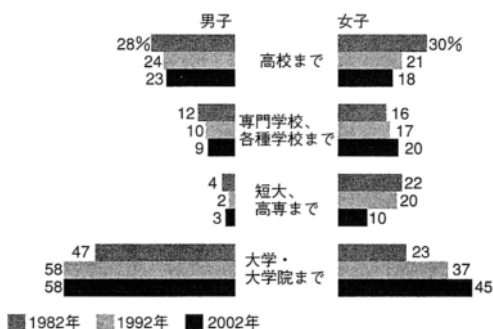


図6 進学の最終目標 (男子、女子)

わせて世の中をよくする」ことよりも「その日その日を自由楽しく過ごす」「身近な人たちと過ごやかな毎日を送る」といった「自由楽しく」派が増加し、「他人に負けまいとがんばる」派が減少している傾向が明らかになった [図8]。

いずれにしても、大学に入学する明確な目標がないまま、「目的はないがとりあえず進学する」傾向や「まだ就職したくないから大学に入る」といった意識が窺える。そのため、「大学に入ること」が目的化し、勉強に力を注ごうとしないのではないだろうか。このことは、前号で筆者が紹介した河本敏浩の指摘にも通じるものである^(註19)。氏は進学塾の講師という立場から、大学生が勉強しなくなった理由について教育制度や日本人の価値観等の視点から分析して次のような興味深い見解を示している。

「日本の高校生は、大学受験こそが勉強の最大の動機づけとなっているので、全国模試を受

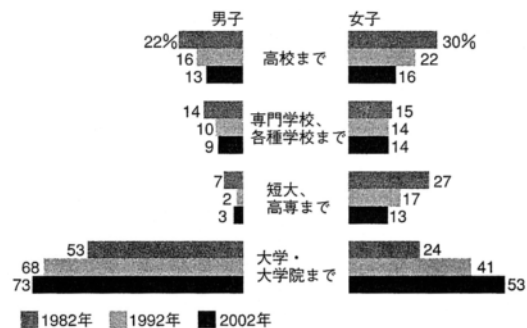


図7 中学生の子どもを持つ父親が子どもにどの程度まで教育を受けさせたいか (男子、女子)

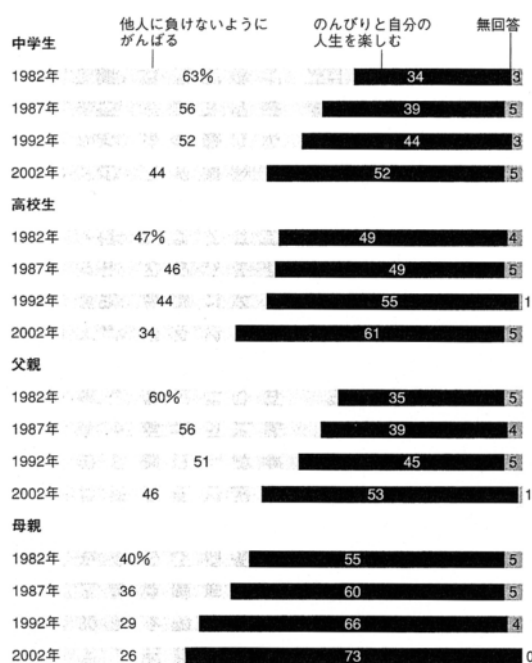


図8 競争意識の変化

け、自分の位置がそれほど高くないと思い知ったとき、さらに勉強を試みても偏差値70などに到達できるはずがないと悟ったとき、くそこそこでいい<AOでいい><推薦でいい>と考えるようになる。これは極めて自然なことである」(河本『名ばかり大学生』光文社新書 2010年1月発行 130ページ)

「センター試験ランキング下位の県は、地元の国立をあきらめて、なおかつ地元にとどまろうと考えた瞬間、私大進学の実選択肢がないとこ

ろばかりである。つまり、地方の高校では、地区を代表する一番手の高校に属する高校生にしか、勉強をする根拠がないのである。1980年代までならば、大学進学者自体が少数派だったために、このことはまったく問題視されなかった。また、1990年代以前の高校ならば、学校推薦による高卒就職が一般的であったため、学力下位の高校生でも辛うじて勉強する意義は保たれていた。しかし、高卒就職は求人が激減し、特に地方の疲弊は甚だしい。それならばと、無理をして大学進学を志すとしても、全国模試を一度受ければ、自分の学力の位置は実感できる。自分の成績が中位以下ならば、選択肢は極めて限られる。東京の私立は金銭的に無理、まして国立など、人生に大きなメリットを及ぼすほどの学歴には手が届かない、となれば勉強の意義は極めて低くなる。高校を普通の成績で卒業し、地元の私立大学や専門学校に入学すればいい、と思った瞬間、日本の現行の教育制度においては勉強の熱など冷めて当然なのだ」(河本：同上書 144ページ)

もちろん、大学生が勉強しない理由をすべて河本の指摘どおりと決めつけるわけにはいかない。こうした傾向の背後には、学生をとりまく就職状況の厳しさを初めとした日本社会の閉塞感が影を落としていることも容易に想像できる。また、以前の日本では一部の大学を除けば大学卒業時にはそれほど専門性を求めることなく就職後の研修等で専門家として育てようとする傾向が強かったのではないだろうか。そのために、日本の大学は「入りにくいが出やすかった」とも言われたのである。ところが、少子化に伴って入り口さえフリーパス（に近い）大学（短期大学）がどんどん増えているのである。このように考えると、保育者になりたいとは言っているものの、目的を達成するための学習意欲は高まらず、「どうせ将来は知れたもの」だから「適当にしておけばいい」という「シラケ」た感情から、卒業後の社会で必要とされる

資質を備えるための努力をしようという意欲の高くない短大生が増加することも頷けるのである [図9]。

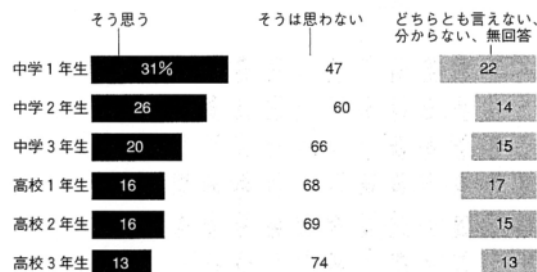


図9 日本の将来は明るいか

最近では、短大に入学してくる学生も自分の基礎学力がないことを意識し始めたようだが、その原因を「ゆとり教育」に押しつけて「自分たちは被害者だ」と責任逃れをする傾向が見られる。ゆとり教育というのは、1976年に「授業についていけない子どもが多いのは学習内容が過密なためであり、それが不登校の増加や授業が荒れる原因になっている」という教育課程審議会（1950年設置、2001年中央教育審議会に統合）の答申（同審議会は1987年には、より積極的にゆとり教育の必要性を説くようになり、ゆったりと授業を受けられるように、教材を削減する答申を出した）を受けた文部省（当時）が1989年にゆとり教育の導入をするために教育課程の改訂を発表し、1992年度から実施したものである。

1998年に、文部省（当時）はゆとり教育をさらに進めるために新しい教育課程を導入したが、この教育課程は教材の3割削減と受けとめられ、大きな反響を巻き起こした。さらに、2002年度からは学校の完全5日制が実施されることになり、年間授業日数は202日程度になった。その結果、小学6年生の授業時間数は1968年度の1085時間から1998年度には945時間になり、国語を例にあげると1968年度には245時間あったものが1998年度には175時間へと70時間も減少した。こうしたことから、ゆとり教育は学力低下を引き起こすという議

論がわき起こることになったのである。

しかし、ゆとり教育世代でも学力の高い学生は存在するのであるから、「自分たちは被害者だ」という認識は必ずしも的を射たものではない。むしろ、学習意欲の低下の原因は、現代社会では勉強することと生活することが分離してしまったからではないだろうか。なぜ勉強するのかがわからなくなれば、興味がわかなくなるのは自然な流れと考えられるからである。

6. 生活感の希薄さが原因

私たちの心は、疑問が解消できたり未知のことが発見できたりしたときには感動し、さらなる探究心が頭をもたげるものである。ところが、近年はいわゆるヴァーチャル化社会になって、そうした機会が減少してしまった。

このことは児童生徒の理科離れが証明している。理科は実験したり観察したりすることによって興味が引き起こされる教科である。ゆとり教育の結果、時間数が削減されて実験や観察ができなくなって教科書中心の授業をせざるを得なくなったことが理科離れにつながっているのではないか。実は現代人の生活がそれと同様の状態なのである。中高生の調査に現れているように、勉強することが将来の良い生活につながると結論づけることは別として、勉強することが生活に役立った「わくわくする」ような気持ちになったりする体験が重要な意味を持っているはずである。

筆者は以前、アンコールワット遺跡を訪問したことがある。その際に、10歳くらいの子どもが何人も日本語で話しかけてきた。もちろん、目的は土産品を売りたいからである。日本人はよく買い物をするので、日本語を覚えれば売り上げが増えることを彼らは体験的に知っている。そのため、一生懸命に日本語を勉強するのであろう。海外の他の観光地でも同様の体験をすることが少なくない。自分の利益につながることが認識されると、

人は言われなくても勉強するようになるのではないだろうか。

このように考えると、現代の中高生や大学生が勉強しなくなったのは、子どもの頃から恵まれた環境で育てられた当然の結果と言えるかもしれない。それゆえ、こうした状況を変えることは容易ではないであろう。生物の身体は使わない機能が退化してゆく。子どもが幸せになるようにと大人が先回りして環境を整え、ほしいものはなんでもそろえてあげた結果が、今日の姿なのではないだろうか。ルソーは『エミール』の中で「子どもを確実に不幸にする育て方は子どもの要求をなんでもかなえてやることだ」と警告している^(註20)。昔に帰れと主張するつもりはないが、私たちは改めて「学ぶこと」と「生活すること」を結びつける努力をしなくてはならない。

保育は子どもを育てることである。既に述べたように、これは太古から人類が行ってきた「当たり前」の営みであり、それは生活の一部でもあった。現代の社会では生きるための生活と学習や仕事などの活動が分離された結果、勉強する意味が見えにくくなり感動が失われてしまったのではないだろうか。

しかも、保育の基本は「人」にあると言われる。成長・発達の上にある乳幼児は「周囲の人」を自分の発達のモデルとして、その一挙手一投足を真似しながら自分の行動に取り入れていくのである。つまり、保育者は「人的な環境」として、子どもたちに大きな影響を与える立場である。

そこで、いま必要なことは、保育者を志す中高生や大学生に栽培や飼育といった生活体験の機会を多く設けることや日常的に老病死といった人間の姿に触れる体験をさせることではないだろうか。そうした体験は「人間とは何か」「人はどう生きるべきか」といった人生観を深めるとともに、生きる目的を主体的に認識することにつながると考えられる。さらに、人間のしあわせは「豊かなモノ」に囲まれて暮らすことだけで得られるので

はなく、自分が目指す目標に向かって懸命に取り
組む中で感じられるものであることに気づくこと
ができると考えられる。つまり、知的な作業（勉
強）と身体を動かすこと（生活）とのバランスを
取り戻すことによって、私たちが本来的に備えて
いる生命力が生き生きと活動を始め、主体的に学
ぼうとする意識が芽生えてくるのではないだろう
か^(註21)。

- (註1) 子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために
保育士等が行う援助や関わりである（保育所保育
指針）。
- (註2) 子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに
展開されるための発達の援助であり、「健康」「人
間関係」「環境」「言葉」及び「表現」の5領域か
ら構成される（保育所保育指針）。
- (註3) 『保育所保育指針解説書』序章 1、改定の経緯
(1)「保育所保育指針とは何か」参照。
- (註4) 「同上書」参照。
- (註5) 保育士養成所保育士資格取得者の就職状況（『最新
保育資料集』ミネルヴァ書房）参照。
- (註6) 拙稿「短期大学における保育士養成について」
（『育英短期大学研究紀要』第27号：2010年2月発
行 参照）
なお、後出の「進学最終目標」を見ると4年制
大学志向が歴然としている。
- (註7) 『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第28号
（2006年4月発行 120ページ）
- (註8) 同上書 121ページ
- (註9) 男女雇用機会均等法は1986年4月から施行された
法律で、職場で女性が差別を受けず、家庭と仕事
が両立できるように作られたもの。
- (註10) いわゆる「3K」とは、「危険」「汚い」「きつい」
の3語の頭文字からつけられた名称で、一般には
若年労働者に敬遠されがちな職場（3K職場）の
ことである。3Kという表現は1980年代末期から
使われ始め、1989年には流行語としてノミネート
されている。具体的にどのような職場を3Kとす
るかには、いろいろな考えがある。
- (註11) 拙稿「短期大学における保育士養成について」

（『育英短期大学研究紀要』第27号：2010年2月発
行 54ページを参照。

- (註12) 拙稿「保育科学生の基本的な行動と礼儀作法の問
題点」（『育英短期大学研究紀要』第20号：2003年
2月発行 53～56ページ参照。
- (註13) 最近、学生の「依頼心」が急激に強くなってき
たように感じられる。学習面では自分で考えようと
せず、答えを教えてもらうことを期待している。
行動面では自分で工夫したり努力したりしようと
しないで、「できない」を連発する。極めつけは就
職活動で、何も活動をしていない学生に指導をし
ようとする「先生、だって〈学生募集要項〉に
就職率は100パーセントと書いてありました」と平
然と答える学生が少なくない。
- (註14) 例えば小学校における「総合的な学習」について
「総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対
応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、
主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や
能力を育てることなどをねらいとすることから、
思考力・判断力・表現力等が求められる〈知識基
盤社会〉の時代におけますますます重要な役割を果
たすものである」等と示されている。しかし、い
わゆる「生きる力」というのは教室で「授業とし
て学ぶ」のでは必ずしも十分とは言えないのでは
ないだろうか。
- (註15) 毎日新聞（平成22年11月28日）
- (註16) いわゆる「シラケ世代」というのは、日本の学生
運動が下火になった時期に成人を迎えた、政治的
無関心が広まった世代を指す言葉。
- (註17) 拙稿「短期大学における保育士養成について」
（『育英短期大学研究紀要』第27号：2010年2月発
行）54ページ参照。
- (註18) NHK 同上書 14ページ参照。
- (註19) 拙稿・同上書 57ページ〈註6〉参照。
- (註20) ルソー『エミール』〈第2編〉
- (註21) このことに関しては次の拙稿「人間の学としての
保育学」（『育英短期大学研究紀要』第18号：2000
年7月発行）・「子育ての根本問題と仏教の人間
観」（『教化研修』第51号：曹洞宗総合研究センター
2007年4月発行）・「仏教保育に期待されること」
（『日本仏教教育学研究』第16号：日本仏教教育学
会2008年3月発行）等を参照。

〔 2010年11月30日 受付 〕
〔 2011年1月6日 受理 〕